第４回「新・関西観光・文化振興計画（仮称）」策定委員会　要旨

日　時：2021（令和3）年7月8日（木）　9：00～11：00
場　所：NCB会館３階 楓の間
出席者：坂上座長、岡部委員、木ノ下委員、北村委員（web参加・途中退席）、東井委員、橋爪委員、平井上席調査役（文化庁からオブザーバー参加）
次　第：１　開会
２　議事
（１）報告
・委員の追加就任について
・「新・関西観光・文化振興計画（仮称）」中間案（素案）たたき台概要について
（２）意見交換
・将来像実現のための戦略について
３　閉会

１　開会

・　野口局長挨拶

２　議事

（１）報告

・　委員の追加就任（木ノ下委員）及びオブザーバー参加（平井上席調査役）について

－事務局（田中次長）説明－

木ノ下委員

・　今回はこうした貴重な場への就任依頼をいただき、感謝したい。最近は、文化庁の支援を得ながら、中之島エリアにおいて日本の近代文化に関わる１４機関により「クリエイティブアイランド中之島実行委員会」というエリアマネジメント組織を立ち上げ、京阪電車をはじめとする企業、大学、ＮＰＯとの連携事業に取り組んでいる。この他、札幌、岡山などにおけるクリエイティブシティに関する事業の委員でもあり、そうした視点でも話をさせていただければと思う。

平井上席調査役（文化庁・オブザーバー）

・　文化庁の本格移転が来年に迫る中、関西の皆さんとともに文化振興に力を尽くしたい。

・　「新・関西観光・文化振興計画（仮称）」中間案（素案）たたき台概要について

－事務局（嘉住参事）資料説明－

坂上座長

・　これまでの会議及び私も含めた各委員への事前ヒアリングを踏まえ、資料を作成してもらった。以前の資料からは大きく変更された部分もある。
・　やや複雑な構造であった全体構成をシンプルな形に見直しを行っている。
・　将来像は「新しい時代」をキーワードに、関西広域連合トータルのキャッチフレーズである「新時代」と整合。「文化・観光首都」については、まだ全国的な知名度が低いので、踏襲して継続的に発信。文化庁の移転で本格的な文化首都の創出への環境が整ってきたことに加え、大阪・関西万博を好機ととらえていきたいという考え方でまとめている。
・　戦略には、これまでの取組との接続的な考え方も含む。委員から万博を活かしたインバウンドを特出ししてはどうかとの意見もあったが、万博は中に組み込む形で整理している。
・　私からお願いした点も含めて整理してもらったが、まだたたき台の段階であり、今回の会議で将来像及び戦略を中心に意見交換をしたい。

（２）意見交換

北村委員

・　計画案全体として、分かりやすくすっきりした。
・　大阪・関西万博に向けた内容が戦略の中に含まれている。前回、大阪・関西万博に向けた戦略は特出しすべきと言っていたが、これはこれで良いと思う。ただ、万博に向けてこれだけはやる、ということなど、観光の観点で万博に付け加えることも考えたい。
・　関西観光本部でグランドデザインを策定していくが、第一に数値目標で齟齬がないよう、足並みをそろえることが必要。第二に、推進体制の確立・強化の戦略を盛り込まれているが、アフターコロナをにらみ、万博に向けた取組を推進していくため、観光本部には十分な財源確保が必要である。インバウンドを関西経済成長のひとつの柱にするためにも、国際競争に勝ち抜く必要がある。
・　関西広域連合からの分担金の増額が必要だと思うし、経済界からもバックアップしたい。

東井委員

・　関西広域連合と関西観光本部の目指す方向は基本的に同じ。
・　当本部が策定するグランドデザイン策定の議論を始めているが、現下の状況下、旅行者数についての目標・KPI を立てるのは難しい。本来、入込客数についての目標を立てるべきであるが、インバウンドそのものが止まっている状態である。
・　グランドデザインは 2025 年までの計画だが、次期関西観光・文化振興計画は 2027 年までの計画であるため、2025～2027 年のアフター万博・レガシーの話がしっかり入っていなければならない。
・　計画案全体としては、前回からかなり整理されてきている。当事者として関わり方が考えやすくなり、ありがたい。

・　体制については、今回も地域との連携強化についての取組が位置付けられている。しかし今の仕事のやり方では 2025 年で終わってしまう可能性があり、「補助金や協賛金が取れれば実施する」という現状では、毎年の事業計画をしっかりと描くことができないのが現実。万博を関西のジャンプ台にしていこうとするなら、「万博に向け、こういう事業を集中的に実施する」という位置づけと支援があるとありがたい。

坂上座長

・　夢を描きつつ、これだけの投資が必要だという提案と、予算獲得につなげるプロセスが必要である。

東井委員

・　プロモーション事業は、予算があればあるほどよいものができる。プロモーションと集客・消費は直接の連動を示しにくいが、やらなければいけないのは事実。「少なくともこれだけの資金措置はする」と言われるとやりやすい。

坂上座長

・　数値目標について、事務局はどう考えているのか。

野口局長

・　インバウンドが止まっている状況であるため、数値目標の議論はあえて先延ばししている状態である。しかし、現在の計画のような数・量だけの目標ではなく、国の目標も念頭におくとともに質にも目を向けた目標が必要であると考えている。

坂上座長

・　国の計画も含めて引き続き検討することとし、宿題としておきたい。

橋爪委員

・　目標については、コロナの状況が今後どうなるかで変わってくる。参考指標を置きつつ、計画期間の途中、中間年次などで目標を立て直すという考え方も必要ではないか。

・　各自治体で宿泊目的税などの財源も蒸発してしまったが、今だからこそ、広域で連携できることがある。例えば大阪湾ベイエリア推進機構では、広域で大きな構想を示し、各自治体ではそれぞれ個別の事業で実施しながら、トータルとして「なぎさ海道」という遊歩道の整備事業を実現してきた。プロモーションなどでも、そうした連携の発想が大切になる。

・　国の動きとして、観光と文化を融合、文化財の利活用をはかる取組を行っていく動きとなってきている。これまでの関西観光・文化振興計画は、そうした国の動きを先取りし、既に観光と文化を融合させた計画となっており、そのような部分を再評価した方が良い。次期計画でも、関西は観光振興、文化振興の相乗効果を重視するといったことを打ち出していってはどうか。

・　「関西文化」という単語が出てくるが、一般的に定義づけされていない文言だと思われる。「関西文化」とした場合、受け取る側の概念は多様であり、初めてその言葉にふれる人にもわかりやすくした方がよい。

・　人材育成について、観光人材の育成に触れられているが、大学や高等教育での観光人材

育成も文言に入れて欲しい。また、将来像実現のための戦略の章だけではなく、「現場から観光人材の確保・育成が必要とされている」ことを現状や課題の章で頭出ししておいた方が良い。

・　万博の本質は国際化だと考える。国際交流活性化のタイミングとして万博をとらえるべき。毎日のように、いずれかの国や地域のナショナルデーの行事が会場内で開催される。関西のいたるところで、国際交流できる機会が生じるはず。博覧会場だけではなく、関西広域でどう盛り上げていくか考えなければならない。例えば15頁「（３）関西広域連合の他分野及び構成府県市との連携」で、広域で新たな国際交流事業を展開するという提案ができるとよい。

北村委員

・　インバウンドが戻るまでの当面の国内対策も大切であるため、インバウンド復活戦略をしっかり記載することも必要。万博までにどのように準備するかが重要になると考えており、繰り返しとなって恐縮だが、インバウンド確保に向けた世界との競争を行っていくために、関西観光本部の財源確保が必要である。

岡部委員

・　これからの 5 年間は今までで最も難しい時期となる。国内旅行もいつから回復するかわからず、取組をフェーズ化して記載する手もあるかと考える。例えば、2022－2023 年をフェーズ 1 としてインバウンド復活に向けた国内中心の取組、2025 年までをフェーズ 2 として万博開催までの取組、フェーズ 3 として万博後の取組、というように 2 年ごとにフェーズ分けして整理し、戦略の優先順位を時期毎に記載するような構成も考えられるのではないか。最初の 2 年は国内でできること、例えばワクチンへの対応、空港における入国レーンの簡素化など、外国から訪れやすくする工夫も必要ではないか。

・　万博単独で見に来る外国人観光客は少なく、万博だけでのインバウンド誘致は難しい。関西の魅力を PR し、関西に来たらプラスで万博もあるよ、くらいで宣伝すれば良いのでは。万博と関西をバラバラに宣伝しないことが大切。関係者が連携し、みんなで意志を共有し、投資やエネルギーを集中しなければ効果が得られない。

・　地元の人が見せたい文化と、観光客が見たい文化には違いがある。特定のセグメントの人をターゲットに研究して対応するべき。外国人観光客がある内容に興味を持った場合、すぐにインターネットで検索する習慣があるという調査結果もあることから、その際にすぐに関西の取組やコンテンツが出るように発信を工夫すれば良い。

・　戦略３（３）の記載内容として「メディアとのネットワーク構築」と出てくるが、もう少し表現を広げて記載しておくべき。

木ノ下委員

・　関西をどのように発信していくかについて、国内では関西という言葉はある程度認知されているが、海外で関西という言葉がどう認知されているのか考えておくべき。「もともと歴史文化を持つ関西」というキャッチーな表現を考えると理解されやすいのではないか。

橋爪委員

・　万博後の観光振興に向けて、大阪湾や瀬戸内海を利用した舟運の利用についてここで示しておくべき。舟運による観光等の再整備の重要性を書くべき。滋賀県（琵琶湖）の舟運もある。

・　基盤整備の話として、新名神や京奈和道路、淀川左岸線の一部区間などが整備される。京奈和自動車道は現在の計画期間内で「橿原～和歌山」がつながる。新名神高速道路「高槻～大津」も 2023 年開通予定、淀川左岸線も進展、自転車道の整備も各地で進んでいる。都市基盤や交通基盤の整備も観光にとって重要な要素であり、目を配っておく必要がある。どのような回遊が生まれるかまだわからないが、今までになかった新たな軸による新しい観光ルートとして打ち出していくことができるようになってきた。

坂上座長

・　万博に向けて基盤整備を明確に打ち出すという大臣発言も日経新聞に掲載されていた。そのようなことも背景に盛り込んでみるのはどうか。

・　大阪湾岸道路のように、自転車道の広域ネットワークイメージを提示すれば、各自治体の取組が進む可能性がある。自転車道がなければ自転車で走れないわけではないが、安全性を含めて広域連合でアピールするという方法があってもよい。

・　道路・交通体系などインフラ整備についても、背景としての記載を考えてほしい。

平井上席調査役

・　新計画で文化を大きく打ち出してもらっていることはありがたい。来年度の文化庁本格移転に合わせ、関西が日本のふるさと、文化の中心であることをアピールし、先進的な取組を広げていくことが重要だと思う。

・　観光に関する記述に比べて、文化に関する記載が少し抽象的に見える。関西の文化の強みは何か、それを意識して戦略を少し具体的に書き込んでほしい。

・　京都、関西に文化庁という政府機関があることを活かして、2019 年のＩＣＯＭ（国際博物館会議）のような文化的な国際会議等の誘致をさらに進めることにしてはどうか。

橋爪委員

・　関西広域連合として、MICE 誘致をどうサポートするか、広域連合には計画に記載することでイメージを提案する役割もあるとのことなので、MICE を日本に誘致する際には、文化庁のある関西に誘致、というイメージ付けができれば良いと思う。

東井委員

・　万博レガシーとして、関西から西に広がる超広域周遊ルートを作れないか、という動きが経済界を中心に出ている。四国、中国、九州、北陸、中部、そして関西。関西国際空港というハブもあり、関西が旗振り役となろうという考え方。

・　関西観光本部としては、関西というものをあえて定義せず、コンセプトエリアとしてウエストコーストやゴールドコーストといったものと同じような扱いとしている。関西の定義が関西観光・文化振興計画の中で整理されれば、グランドデザインの方でも活用したい。関西がユニークベニューの拠点となれば、観光だけでなく文化力の面でも固有性が認

知され、MICE も呼びやすくなる。

・　古代から現代とともに、未来につながるとわかることが必要。現状では、未来部分が弱い。例えば先端的企業の立地など、未来を感じさせるイメージが大切。

・　将来像実現のための戦略には、連携という文言が多い。連携を図る、というのは使いやすい文言であるが、実態は連携できていないことも多い。連携を前向きに進めるため、例えば連携自体を数値目標化して、できなければ努力を促す、連携のための予算を確保するなどの強い方策があってもよい。

岡部委員

・　連携は、実際の進め方が悩ましいところがある。これまでは急増するインバウンドにとりあえず急場対応してきたが、世界トップレベルのポテンシャルがあるのだから、予算の使い方も含めてもっと広域でうまくやれるはず。他国ではうまくやっている。

・　インバウンド対応では、同じ人にいろいろなチャンネルで情報発信を行っていては、情報を受けた人が迷ってしまうことになる。関係者が情報を共有するとともに、とりあえずここを見れば良いという統一された仕組みをつくり、スピーディ・オンタイムで活動を見える化することが必要である。様々な国・機関と多様なチャンネルを通じたつながりがあるので、関西国際空港の力も活用してほしい。その際、各国の旅行・観光関係者とつながることができるプラットフォームがあると良い。

・　コロナからの回復期については各国とも同じように考えている。九州も福岡を中心に、中国マーケットへの対応に取り組んでいる。

坂上座長

・　実行にあたって関西国際空港との連携は重要である。

・　国との有効な連携できる協議が必要である。

木ノ下委員

・　関西広域連合が地域をどうつなぎ、ブランディングしていくことができるか。まず数年は国内ネットワークの関係づくりを行い、どうハブ化していくかだろう。

橋爪委員

・　中之島のクリエイティブアイランドの構想は、私が先に提言したミュージアムアイランド構想を発展させたもの。ベルリンの博物館島（Museumsinsel）やフランクフルトの博物館群などを意識した命名である。すでに京都岡崎など文化観光機能の集積エリアがあるが、ほかの都市でも新たなクラスター（文化観光クラスター、文化創造クラスター等）の概念が必要。これまでも文化と観光の融合は図ってきているところであるが、観光振興と産業振興の親和性も高いと考えるので、文化産業クラスターという発想も必要ではないか。

・　万博前後で、節目の年がもうひとつほしい。例えば 50 年前に構想が発表された東海自然歩道のうち、近畿自然歩道の全線開通（2003 年）から 20 周年となる。こうした、かつてつくってきたものにもう一度、手を入れる年次があってもよい。

・　また、70 年万博のあと、国内旅行の落ち込み対策として当時の国鉄がディスカバージ

ャパンの取組を進めたことがあった。今回の大阪・関西万博ののちにも、各地の文化を再発見するキャンペーンを展開してみてはどうか。

坂上座長

・　周年事業については、河内委員から前回もお話があった。

事務局（田中部長）

・　河内委員には先だって意見をいただいている。近松門左衛門の周年事業、あるいは劇場のバックヤードツアーなど、今あるものを深める取組が必要との提案等があった。

坂上座長

・　本日は戦略の内容について議論ができた。

・　取組全体をブランディングして関西の特長を打ち出していく、という話もあるが、それはこれまでの議論の繰り返しを避けることに留意しつつ、担当者同士で情報の共有をデイリーに図っていくことや、改めて関西の魅力を見直し、将来像実現のための戦略をフェーズ毎の時系列をもって取りまとめてはどうかとの意見があった。

・　事務局で本日の意見を整理し、最終案の提示に向けてとりまとめをお願いする。なお、会議後、追加のご意見などあれば、事務局までお願いしたい。

・それではこれをもって本日の意見交換を終了する。進行への協力に感謝したい。

３　閉会

野口局長

・　計画の中間案については、9 月の連合委員会、議会に提示し、その後、パブリックコメントを実施する。今回いただいた様々な視点を踏まえ、中間案をとりまとめる。次回の策定委員会は開催したいが、開催方法等については検討したい。

・　それでは本日の会議はこれで終了させていただく。

以上